

軽快し、第20回の消化器学会にすでに発表し、討議した症例であります。

6年前、自動車事故により右大腿骨折をおこし、その修復術の際、1,000mlの輸血を受けその5ヵ月後に発熱・悪心・嘔吐、全身倦怠黄疸、肝腫大(正中線で6横指)をみとめて入院、発病後9日目に肝濁音界は消失し、3度の意識障害を来たした(MG 47、GOT 880以上、GPT 315以上、LDH 1040、A1-P 24.1 ZTT 13.4、TTT 13、プロトロンビン24.7秒)入院後4日目に新鮮血5,000ml交換輸血しリンデロン20mg、腹膜灌流を同時に併用施行しました。その後、自覚症状、肝機能検査は著明に改善しました。肝機能では黄疸指数の中等度の上昇、LDH、トランスアミナーゼの高度上昇をみとめ、血清タンパクはprealbumin4.2、 α_2 H Sglycoprotein30.6といずれも低下がみられましたが、交換輸血後の1~2週間で軽快しました。肝生検は1ヵ月後に行ないましたが、(図1, 2)スライドのよ

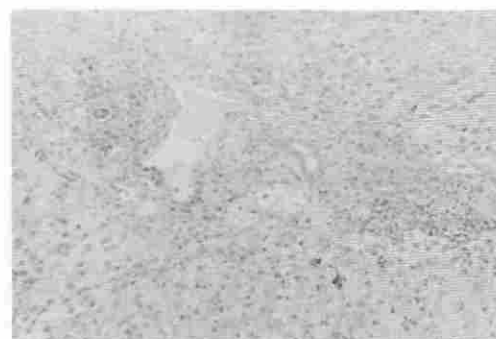


図1 肝生検組織(1ヵ月後)
H E 染色

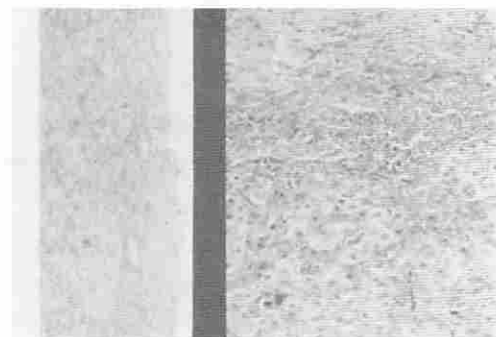


図2 肝生検Azan染色(昭和48年1月)

うにH E染色では門脈域は軽度の細胞浸潤、線維化と細胆管の増生がみられました。周囲の肝細胞は再生変化に伴い、再生化と小腫状の肥大となり、Kupffer細胞の出現をみとめました。

アサン染色では(図3)、confluent necrosis

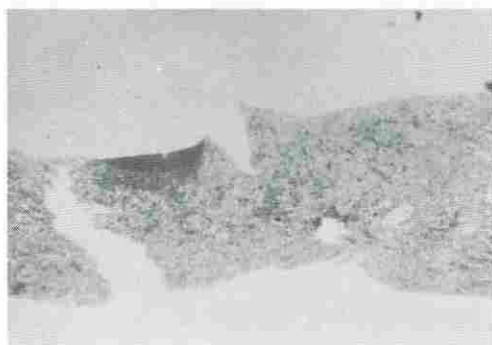


図3 肝生検

がみられ、collapsにおち入り、その周囲はfiberの増加とreticulumfrem warkの形成がみとめられました。小葉構造は乱れて、reticulou fiberの増生に伴いP-P結合がみられました。

その後の経過(表-1)では数ヵ月で、肝機能はほとんど軽快したので、49年1月に結婚することになりました。その後1年間病院にてfollow upして、肝機能にはまったく異常はみられなくなりました。

4年目の昭和50年8月に、胃痛を訴え当クリニックを訪れました。この時、再び軽度の肝障害、とくにTTT、ZTTの異常が目立ち、GOT、GPTの上昇は弱く一過性でありました。

翌年の51年5月、交換輸血後2年6ヵ月目ではありますが、妊娠の判定がなされ、金沢の某大病院婦人科より相談をうけました。金沢医科大学などのDeltaを参考にしてさらにfollow upすることとなりました。

肝機能障害は妊娠8~9ヵ月目になって始めてGOT、GPTの100~200台となり、膠質反応の異常をみたが正常男子を分娩しました。婦人科を退院後、腹痛とGOT、GPT

に高度の上昇をみとめたので再び、51年12月に2回目の肝生検を行ないました。(図-4)

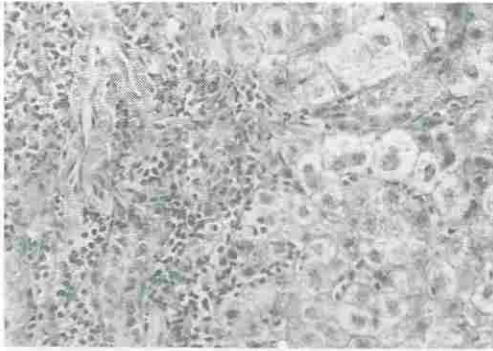


図4 肝生検(昭和51年2月) 出産後1ヵ月目

5年後の2回目肝生検であります。門脈域には軽度から中等度に細胞浸潤があり、1個所に狭いP-P結合をみとめました。4年前の像はかなり軽快し、小葉のゆがみはなく、慢性肝炎というよりpersistent hepatitisをみるような像でありました。(図-5)。

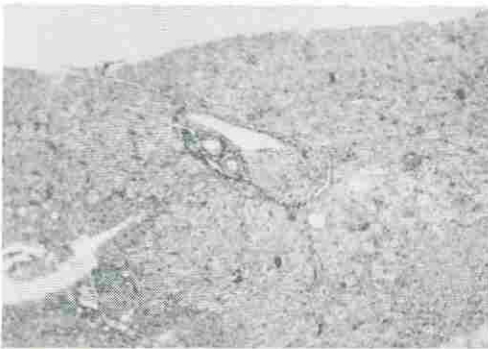


図5 肝生検(昭和51年12月)

本症の経過をまとめると、輸血後肝炎の増悪で、交換輸血 5,000mlの輸血をしています。その時64人の供血者ではHBs-抗原がPHA法で64倍の者が2名含まれていましたが、その後、HB抗原、抗体とも陽性でありました。

臨床的にはprecomaをおこすなどの急性の重症肝炎症状を呈しながらも、当時の治療により、すみやかに軽快し、1ヵ月後の生検では急性肝炎を示すようなNecrosisの組織がみられません。患者はまず結婚にまよ

い、さらに妊娠することと出産児の異常について、かなりのけねんがありましたし、妊娠中の肝障害はほとんどなく、分娩後にむしろ、異常反応がおこったが、1ヵ月後に完全に軽快して投薬も中止していました。ステロイドは一時的に使用したので、肝生検の結果判明後に使用を中止しました。その後はまったく異常はありません。

最近、武内、高田、小林先生らの文献を引用して本症例を線で引いてみますと、1本症例では、(図6、図7)のように、半減期の短いタ

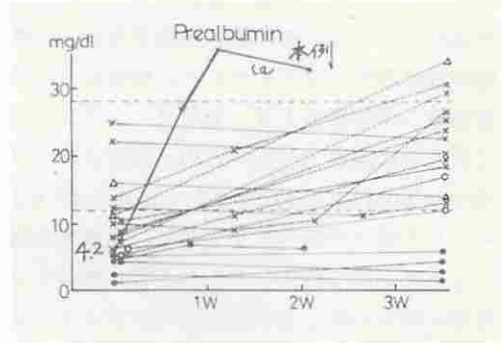


図6

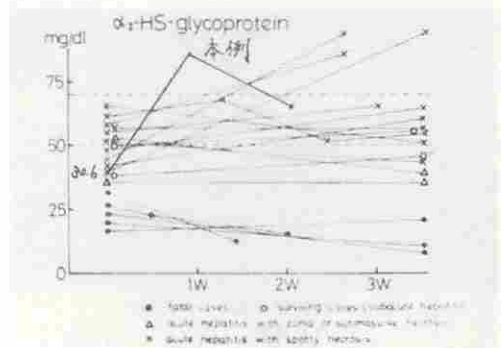


図7

ンパク prealbumin, α_2 H S glycoprotein のいずれもは、激症肝炎死亡例のようにかなりの低下があったにもかかわらず、かなり急速に軽快していることが注目されます。

今は、 α_2 H S glycoprotein、prealbumin の早期診断は激症肝炎の予後判定に有用であることがあらためてうなずかれた例でもあります。

この患者は現在、肝機能検査ではほとんど異常をみとめませんが、最近、金沢大学第2病理に依頼し、Antibody dependent cell mediated cytotoxicity test を行なっていただきました。自己血清で処理した標的肝細胞が健常者リンパ球によって肝細胞障害性が陽性となりました。(図-8)。このことは血清中に、肝細胞崩壊に関与する因子があると考えられる最も新しい研究でもあるようですので、この患者に関しては今後も十分なfollow upが必要と考えられることになりました。

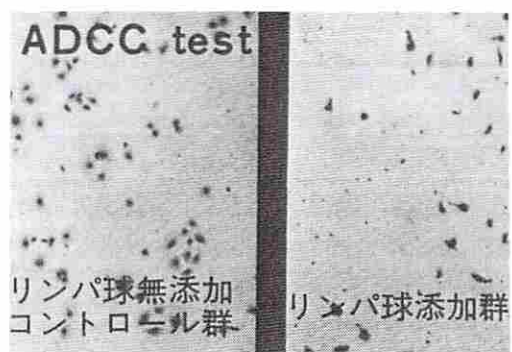


図8

文献一省略